日英翻訳における受容化と異質化について（２）
― 吹き替え映画翻訳の認知言語学的事例研究 ―

貞光　宮城（大学院創成科学研究科 工学系）

On Domestication and Foreignization in Japanese-English Translation (2): A Case Study of Film Dubbing from a Cognitive Linguistics Perspective

Miyagi SADAMITSU (Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Engineering Department)

Abstract: This paper follows on Sadamitsu (2020) of a case study on a dubbed film from Japanese into English. Focusing on Venuti's (1995) domestication and foreignization in translation, the paper analyzed the gaps in language/culture and in time between the source and the target text of the translation, and demonstrated that domesticated samples were found far more than foreignized ones in order to fill the former type of gaps. This paper goes on to more precise analyses on how the translators have dealt with the gabs between the two languages by closely looking at their domesticating strategies for English readers/audience of the film. Specifically, their coping strategies of adding/deleting information of the source text will be discussed here based on a Cognitive Linguistics perspective.

***Key words**: translation, translatology, domestication, foreignization, film dubbing, Cognitive Linguistics*

１．はじめに

本稿は、前拙稿貞光（2020）[1] に続くものである。宮崎（2015）[2] が日本の文芸作品の英訳実践の中で指摘する、２つのテクスト間で克服すべき「距離」のことを、前稿に引き続き以下のように呼ぶことにしている。

(1)　a.　言語圏の隔たり
　　b.　時間の隔たり

前拙稿ではこの２つの隔たり（距離）について、実際の翻訳事例を Venuti（1995）[3] の受容化（domestication）と異質化（foreignization）の観点から分析した。分析対象としたのは、起点テクストが宮崎駿監督作品『となりのトトロ』（1988）で、英訳された目標テクストは Walt Disney Home Entertainment 版の *My Neighbor Totoro*（2005）の吹き替え音声である。[4] 実例を分析した結果は、起点テクスト（日本語）と目標テクスト（英語）との間のシフト（ズレ）が、(1) の言語圏の隔たり・時間の隔たり共に、受容化の例がほとんどを占め、異質化の事例はごく限られたものに留まっていた。

そこで本稿では、この受容化のシフト（ズレ）に絞り、１つひとつの翻訳事例をより具体的に分析し、２つの言語間において伝達情報のシフトがどのように生じ、そこに翻訳者のどのような対処（工夫あるいは苦心）がなされているかを考察していく。

２．シフトの分布

起点テクスト（日本語）と目標テクスト（英語）との間で、情報上の差が生じている翻訳シフト（ズレ）の可能性としては、以下の３種類が考えられる。

(2)　受容化における翻訳シフトの可能性：
　a.　起点テクストにない情報が、目標テクストで追加されている場合
　b.　起点テクストの情報が、目標テクストで削除されている場合
　c.　起点テクストの情報が、目標テクストで変更されている場合

これらのそれぞれの場合において、なぜそのようなシフト（ズレ）が生じた／生じさせたのか、翻訳者は何の目的でそのように対処したのかを考察していく。

まず、前拙稿同様、全体的なシフトの状況を見るために、それぞれの事例数を文単位で数え上げた結果を以下に挙げておく。[5]

(3)　分析対象となる全台詞数

起点テクスト	目標テクスト
732	843

(4)　３種類の翻訳シフトの分布

追加 (2a)	削減 (2b)	変更 (2c)
127	25	96

この結果およびそれぞれの具体的な翻訳事例を元に、次節において、受容化における翻訳者の対処方法を考察する。

３．考察

前節の結果では、全体的な傾向として、目標テクストにおいて情報が追加（および変更）された場合が、削除された場合よりも圧倒的に多くなっている。これは、翻訳テクストの方が原文テクストよりも長くなるという一般的な傾向に合致していると言える。[6] また、貞光（2020）でも指摘したことであるが、これらが受容化の事例を観察したものであることを考えれば、英語圏の読者に理解しやすいようにと、目標テクストにおいて情報が追加（および変更）されることが頻繁に起こることは容易に想像できる。しかしながらそれだけでなく、受容化の事例にもかかわらず、目標テクストの情報が削られている場合も少なからずあることは、興味深い点である。（この点については、3.2 で考察する。）

それでは、それぞれの場合において、どのように受容化がなされているのか？ 翻訳者の対処（工夫／苦心）はどのようになされているのか？ について、以下で具体的な事例を挙げて考察していく。ただし、紙幅の都合もあり、本稿では情報の追加 (2a) および削除 (2b) について分析を試みる。変更 (2c) については、対処の方法も多岐に渡るため、ぜひとも稿を改めて論じたいと考えている。また、翻訳者の意図が不明である追加／削除の処理もあり、その例を 3.3 でいくつか挙げておく。

3.1　追加 (2a) の事例

まず、起点テクストにない情報が目標テクストにおいて追加されている事例を見る。ここでは以下の３点に着目し、考察を進める。

(5)　i) 情報を明示化するための追加
　　ii) 言語圏の隔たりを補うための追加
　　iii) 映像と台詞を合わせるための追加

まず、i) 情報を明示化するための追加とは、起点テクスト（日本語）で提示されている情報だけでは曖昧さが残り、そのままの情報を目標テクスト（英語）において言語化しただけでは、理解しづらい場合に、翻訳者がそれを補うために対処した結果であると考えられる。この事例は、追加 (2a) の中でも最も多く、受容化でも最も主要な方略の１つであると考えられる（斎藤（2007）を参照）。

具体的な事例としては以下のような例がある。

(6)
サツキ：お父さん、カサ持ってかなかったね。
メイ：　メイもお迎え行く！
Satsuki: Dad’s left his umbrella here. I better take it to him.
Mei: I wanna go, too!
（00.46.20）[7]

サツキの発話に「出迎える」ことは述べられていないが、高文脈依存型の言語である日本語の場合は、十分にそれが伝達可能となっていると言える。一方、低文脈依存型の英語では、それを明示する必要があり、その情報が明示化されている（久野 1978、西光 1987、他）。[8]

(7)
サツキ：あの、このカサ、カンタさんが貸してくれたんです。
カンタの母：へえ。あの子が…
Satsuki: Oh, I wanted to give back this umbrella that Kanta lent us.
Kanta’s Mother: What? He lent you this?
（00.47.04）

上の例 (6) と同様に、原文で明示されていない「傘を返しに来た」ということが、訳文の英語でははっきりと言語化されている。

(8)
サツキ：夢だけど、
メイ：　夢じゃなかった！
Satsuki: I thought it was a dream!
Mei: But it wasn’t a dream!
（01.01.58）

この例は、明示しておかなければ論理的に辻褄が合わなくなるような場合である。起点テクストに「思った」などはないが、英語では I thought などを補足しておかなければ、日本語で表示されている情報だけを言語化すると、矛盾を来すことになる。

(9)
ばあちゃん：そうかい。いよいよ退院か。
サツキ：ううん、まだ本当の退院じゃなくて、月曜日には病院へ戻るの。少しずつならすんだって。
ばあちゃん：そうかい。
Granny: Oh, good! She’s finally leaving the hospital, is she?
Satsuki: No. The doctor wants her to get used to the new house a little at a time. She goes back on Monday.
Granny: Is that so?
（01.03.58）

(10)
サツキ：心配してたの。お母さんがキライだと困るなって。
Satsuki: Mei was worried that you wouldn't come home if the house was haunted.
（00.23.26）

これらの例では、日本語において言語化されていない動作主（主語）が、英語において明示化されている。例 (9) においては、「少しずつ慣らす」方針であることは、文脈からお母さんの担当医の指示であろうということが明示されていなくても分かるが、英語ではその主語を省略することはできないため、言語化されている。例 (10) も同様の対処がなされているが、ここでは、主語を明示することで、解釈の

違いを生む可能性さえ生じている。起点テクストでは「心配してた」動作主は明示されておらず、日本語母語話者の著者の解釈では、サツキ本人（あるいは彼女を含めた３人（メイとお父さん）の間での話の中）であろうと理解されるが、目標テクストではそれが Mei と限定的に表現されている。[9]

(11)
サツキ： おばあちゃん。お父さん、夕方まで帰らないの。
Satsuki: What should I do with it, Granny? Dad won't be home till evening.
（01.04.34）

日本語では「助言を求めている」意図を伝達する言語表現はない。その状況あるいは場面設定を述べるだけに留まっていても、その伝達意図を汲み取れる一方、英語ではそれをまず明示し、それに続いてその場の状況（事由）を述べている。（Nisbett 2003、Nisbett and Masuda 2007）。[10] これも文脈依存度の違いを補うために、英語では情報を追加しなければならなくなっていると言える。

(12)
サツキ： お母さん、死んじゃったらどうしよう。
ばあちゃん： サツキちゃん。
サツキ： もしかしたら、お母さん…。
Satsuki: Granny, what will we do if she dies?
Granny: Satsuki!
Satsuki: Maybe she’s dead already.
（01.09.43）

サツキとしては母の死の可能性について、それをあまり口に出したくないという心理的な側面が、言い澱んでしまうところで表されていると考えられる。一方、英語での Satsuki はそれをはっきりと言語化している。

次に、ii) 言語圏の隔たり (**1**a) を補うために情報が追加されている事例を考える。[11]

(13)
：
Dad: Don’t forget to take your shoes off, girls.
（00.06.22）

これは貞光（2020）でも指摘した例である。ここで日本語が空欄になっているのは台詞がなかったことを意味しており、この情報は目標テクストで全て追加されたものである。（当然のことながら、映像上では発話者 Dad の口元は見えていない。）靴を履いたまま家の中に入る英語圏の視聴者（特に小さな子ども）への配慮から、日本文化や習慣への理解を助けるために情報を追加し、受容化の措置が取られたものであると考えられる。

(14)
お父さん：案外そうかもしれないよ。ほら。
（とうもろこしに書かれた文字）「おかあさんへ」
Dad: It sounds crazy, but maybe you did. Look at this.
Mom: For Mommy.
（01.23.28）

この事例は、映像の中で日本語の文字だけで表示されている情報を、目標テクストにおいてそれを音声で言語化している例である。これを英語字幕を使って映像の中でその情報を伝達するという方法も考えられるが、ここでは、それを Mom が読み上げた発話として音声で伝えている。

最後に、iii) 映像と台詞を合わせるための追加の例を挙げておく。これは、映像メディアの翻訳において特有の追加であると言える。特に、登場人物の発話の様子が映像中に表示されている時、その口元が動いている間中、音声が流れているように（特に時間的に合うように）するためである。[12] 貞光（2020）でも指摘したが、割り当てられた同じ時間の間に音声で伝達できる情報量が日本語と英語で異なり、英語の方が単位時間当たりの伝達情報量が多いように思われる。そして英語の方がより具体的で伝達内容が多くなっている傾向がある。[13] そのため、映し出される口の動きに合わせるように発話量を増やすかたちで、大幅な時間のズレは生じないように配慮されている。以下の例は、起点／目標テクスト共にほぼ発話している時間の長さは同じであるが、伝達情報量は（台詞の数としても）翻訳の方が多くなっていると言える。

(15)
お父さん： お家のかたは、どなたか、いらっしゃいませんか？
Dad: Hello there. Are your parents around? We’re your new neighbors.
（00.03.36）

(16)
メイ： マックロクロスケ逃げちゃった。
Mei: I caught a soot gremlin, but he got away.
（00.14.17）

(17)
ばあちゃん: んだ。だあれもいねぇ古い家に湧いて、そこら中、ススと埃だらけにしちゃうのよ。
Granny: That’s right. They live in old empty houses, and run all over the place, coverage everything with dirt.
（00.14.54）

例 (15) では、起点テクストの方に We’re your new neighbors. に相当する情報はない。例 (16) では、I caught a soot gremlin は前提条件であるとして述べられていない。例 (17) では、run all over the place の情報が追加されている。これらの情報は、仮にそれが目標テクストになかったとしても、全体的な物語の展開上、大きな問題になることはないと思われる。例えば、例 (16) であれば、以下のように逐次翻訳に近いかたちになっていたとしても、十分機能すると考えられる。

(18)
メイ：　マックロクロスケ逃げちゃった。
Mei:　A soot gremlin got away.

つまり、映像翻訳の場合、時間調整のためのテクスト（音声）の選択も重要な条件の１つと言える。

言わずもがなのことであるが、目標テクストにおいて情報が追加（あるいは削除）されているのは、ただ映像と台詞を合わせるためだけではない。登場人物の口元が映像で表示されていない（映像と音声の時間を合わせる必要がない）にもかかわらず、以下のように、情報が追加されることも往々にして起こっている。

(19)
サツキ：　はい。自分で包んで。
Satsuki:　There you go. Wrap it up so it stays fresh.
（00.25.51）

映像翻訳において、映像と台詞を合わせることは、情報を追加（あるいは削除）するための必要条件の１つでしかない。

3.2　削減 (2b) の事例

事例数の分類結果 (4) で示されているように、目標テクストにおいて情報が追加される場合に比べて、削除される場合は少ない。その主な理由としては、翻訳が目標テクストの読者（視聴者）にとって全体的に分かりやすいものになっていることが望ましく（必然的に目標テクストは受容化されたものとなる）、そのため、その理解を助けるために、説明を補うかたちで情報が追加されることが頻繁に生じるのである。しかしながら、興味深い点として、読者に理解しやすいようにする方略は、何も情報を追加するだけではないということである。受容化の事例にもかかわらず、目標テクストにある情報を削ることによって読者への分かりやすさを促す対処の方法もあることが分かる。以下でいくつか例を挙げて考察する。

まず、情報削除の事例として最も多いのが、日本（語）独特なものを敢えて取り除くことによって、視聴者（読者）にとって全体的な物語の分かりやすさを優先するという方法である。つまり、起点テクストにある情報を全て厳密に目標テクストへ移して（移そうとして）しまうと、かえって英語圏の読者には全体が分かりにくいものになってしまうため、それを取り除いて対処する場合である。[14] いわば、(1a) の言語圏の隔たりが初めからなかったかのように処理するのである。その典型的な例が日本（語）特有の事物や概念の翻訳の場合である。

(20)
サツキ：ササの葉でくるんで、リュウノヒゲで縛ってある包みでした。
Satsuki:　It was wrapped in a bamboo leaf and tied with a ribbon made of grass.
（00.55.42）

(21)
お母さん：今、そこの松の木で、サツキトとメイが笑ったように見えたの。
Satsuki:　I thought I saw Satsuki and Mei smiling at us from up in that tree.
（01.23.19）

これらの例では、日本（語）独特の事物（ここでは植物）の具体的な名称が目標テクストでは削除されている。例 (20) では「リュウノヒゲ」が grass に、例 (21) では「松の木」が tree という具合に、固有名に代わってより一般的な名称で表現されている。日本語話者にとっては、リュウノヒゲや松の木の具体的な形状や色あるいはその匂いまでも喚起されるはずであるが、そうした詳細なイメージは伝達されないことになる。それでも、物語全体の展開にはそれでほとんど影響はないという判断での対処と言える。例えば 例 (20) の「リュウノヒゲ」のところを *ryunohige* mondograss, whose leave are long and narrow などとより原文の情報を詳しく記述しようとすると、物語の流れも滞り、映像の時間内にも収まりきらなくなってしまうことになる。[15]

次の例は地名である。

(22)
お父さん：　さあ、まだ挨拶に行っていなかったね。
サツキ：あいさつ？
お父さん：　塚森へ出発！
Dad:　Hey, let’s give the forest spirits a proper greeting.
Satsuki:　A greeting?
Dad:　Of course. Come on. Let’s go!
（00.38.58）

(23)
カンタ：さっき、神池でサンダルが見つかったんだ。
Kanta:　A little while ago, they found a sandal in the pond.
（01.14.24）

これらの例でも、固有名がより一般的な名称によって表現されている。日本語話者にとっては、「塚森」や「神池」という文字や音の響きから、そこがおそらく「古くからその土地に存在しているもの、神聖なもの、畏怖を感じるもの」というイメージが喚起されるが、[16] それらは目標テクストでは削除されることになる。こうした付加的な情報は、これらをたとえ原文通りの名称で Tsukamori や Shin-Ike としても伝えることができない。それを詳述するよりも、物語が滑らかに展開する方を優先したと考えられる。これはつまり、各語から喚起される百科事典的知識をどれくらい目標テクストに移す必要があるのかという翻訳者の判断に基づくことになる（Lakoff 1987、Langacker 1987、西村 2002、籾山 2002、他）。[17]

3.3　追加／削除の意図が不明な事例

最後に、起点テクストと目標テクストを相互参照して、その翻訳処理の意図が不明なものをここに挙げておく。まず、情報の追加の方では次のようなものがある。

(24)
サツキ：
Satsuki: Hey, Dad. There it is.
（00.22.38）

お母さんの病院へお見舞いに行く途中の場面で、映像では、サツキがお父さんに向かって何か話しかけているところが表示されているが、起点テクストでは無音となっている。翻訳者はそこに上の発話を追加している。

次の例も起点テクストでは無音であったところに言語情報が追加されているものである。

(25)
ばあちゃん：
Granny: Satsuki!
（01.16.50）

妹を方々探し尽くし、最後の手段を思いついて駆け出していくサツキの背中に向かって、ばあちゃんが何か叫んでいる口の動きだけが映像では描かれていて、起点テクストではその音声はなく、無音となっている。ここでは、叫んでいるばあちゃんの声も周りの音も全く耳に入らなくなったサツキの心理状態を表している（それによって視聴者は自然とサツキへ感情移入していく）ためものではないかと考えられる。これが、目標テクストにおいては全て言語化されることによって、客観的な描写となっている。皮肉なことに、視聴者（読者）のための受容化を意図してなされたはずの情報の追加によって、原文で伝達していたものが失われているのではないかと思わざるを得ない。

次の例においても同様の結果となっていると言わざるを得ない。

(26)
お父さん：　心配したかい？
サツキ：出たの！お父さん、出た出た！
メイ：　ネコ！　ネコのバス！
お父さん：　ん？
Dad:　Were you worried?
Satsuki:　Totoro came back, Dad! I saw him!
Mei:　We saw a cat bus, too!
Dad:　What?
（00.54.38）

起点テクストには全く明示されていない、Totoro という情報が目標テクストにおいては Satsuki の発話の最初に(動作主を示す語として)提示されている。お父さんの発話「ん？」あるいは What? にあるように、子どもたちがいったい何のことを言っているのか分からないところが、ここでは表現されているものと思われるが、目標テクストにおいては、情報を追加したが故にその効果が軽減されてしまっていると言わざるを得ない。

次に、情報の削除の方を挙げておく。以下の例では、何故起点テクストにある情報が削除されたのか不明である。[18]

(27)
お母さん：　退院したら、今度はあの子たちに、うんとわがままをさせてあげるつもりよ。
お父さん：　おいおい。
Mom:　When I get home, I'm going to spoil those girls rotten.
Dad:　(LAPHGTER)
（01.22.42）

起点テクストの「おいおい」には、「あまり度を過ごさないように」といった含意を感じ取ることができるが、果たして目標テクストにあるような笑い声だけでそれが伝達できるのであろうか。活字での翻訳の場合であれば、声の調子や笑い方などが伝えられないため、これとは別の翻訳結果になったかもしれない。

以下の３つの例は、起点テクストにある（本来伝えるべきであったのではないかと思われる）情報の削除によって、残念ながら、目標テクストにおいてそれが伝達され得なくなっていると考えられるものである。

(28)
ばあちゃん：　川で水汲んで来ておくんな。
サツキ：川で？
メイ：　メイも行く！
Granny: Who'd like to fetch some water for the pump?
Satsuki: I'll go get it.
Mei:　I'm coming, too!
（00.15.42）

(29)
メイ：　お父さーん。メイ、おねえさんみたい？
お父さん：うん。お弁当さげて、どちらへ？
メイ：　ちょっとそこまで。
Mei:　Hey, Dad! Do I look like a big girl?
Dad:　You do. Are you going somewhere?
Mei:　I'm just off to run some errands.
（00.26.38）

(30)
男２：　おーい。間違いだとよぉ。
男１：　じゃあ、どこいったんだろ。
男２：　もういっぺん捜し直しだな。
女：　早くしないと暗くなるよ。
カンタの父：　すまねぇな。みんな。ご苦労でも手分けして頼むよ。

男１：　いやあ、お互いさまだから…
男２：　だれか駐在に知らせた方がいいな…
Man：　It's not her sandal!
：
Kanta's Dad: All right everyone, I know you've spent a lot of time here already, but we still need your help.
：
（01.16.28）

例 (28) では、起点テクストの「川で？」で、田舎に引っ越してきたばかりのサツキにとって、これから生活のために使用することになるポンプ（井戸）の水を「川」から汲んでくることが意外であったことが表されていると考えられるが、目標テクストにおいてはこの情報は提示されていない。つまり、その時のサツキの好奇心を駆り立てる意外性は伝達されなくなってしまっている。また、例 (29) は、貞光（2020）でも指摘した例である。（お弁当を持っただけで）大人ぶって見せる小さな子どもに合わせて、大人に話しかけるように「お弁当をさげて」どちらへお出掛けになるのかと尋ねるところに、皮肉の込もったおもしろさがあると思われるが、目標テクストでは「お弁当」の情報は提示されていない。[19] そして、例 (30) では、原文テクストの台詞自体が翻訳テクストではいくつも削除されている。例 (30) 中の翻訳テクストではそれらが空欄で示してある。幾人もの人が捜索にあたっている騒然とした状況や、「駐在に知らせた方がいい」で述べられているような深刻さが高まっていく様子が、残念ながら、翻訳テクストでは十分伝えられなくなってしまっているように思われる。[20]

４．結び

本稿では、前拙稿貞光（2020）に引き続き、吹き替え映画翻訳において言語情報がどのように翻訳されているのかを考察した。前拙稿では、受容化と異質化の観点から、起点テクストと目標テクストの間に存在する２つの隔たり（言語圏、時間）を分析し、言語圏間の距離を縮めることを目的とした受容化の事例が圧倒的に多いことを述べた。その結果に基づき、本稿ではその個々の翻訳事例を具体的に観察し、伝達情報上のズレ（シフト）がどのようなところで生じ、それに対して翻訳者がどのような対処を行なっているのかを考察した。

特に本稿では、原文の日本語と翻訳の英語との間で言語化された伝達情報に差が生じている翻訳シフト（ズレ）を、３つの場合（追加、削除、変更）に分類し、その内の情報の追加と削除の場合に絞って議論した。

まず、目標テクストにおける情報の追加について 3.1 で論じ、情報の追加が受容化の方略の中でも最も主要なものであることを、今回観察した翻訳シフトの総数からも確認した（表 (4) 参照）。その上で、(5) に示したように、その目的に応じて、i) 情報を明示化するため、ii) 言語圏の隔たりを補うため、そして iii) 映像と台詞を合わせるための場合、に分けて考察した。

情報の追加を i) 明示化のために行う必要があるのは、起点テクスト（日本語）と目標テクスト（英語）の言語的特徴に違いがあることから生じている。ここでは、文脈依存の差を埋めるために情報の追加が必要になる場合、動作主（主語）を言語化しなければならないために追加が必要になる場合、そして、言語化において着目する観点の違いを埋めるために情報の追加が必要になる場合について、それぞれ具体的な事例を挙げて考察した。次に、日本語と英語での ii) 言語圏の隔たりを補うために情報の追加が必要になる場合としては、文化的習慣の違いを分かりやすく伝えるための場合と、文字表記での伝達を音声表示の伝達として追加した場合を見た。そして、iii) 映像と台詞を合わせるための情報の追加は、(i) の明示化の目的を併せ持つものも含め）起点テクストで表示されている映像（発話している口元の動き）と、目標テクストとして英語で発話される間の時間の調整のために、追加が生じたと見られるものを取り上げ考察した。

次に、3.2 において、目標テクストにおいて情報が削除されている場合を観察した。目標テクストの読者（視聴者）にとって、その理解を助けるために説明を補うかたちで情報が追加されることは、受容化の方略として容易に予測できることであるが、興味深いことに、原文にある情報を削除することによっても、目標テクストの読者（視聴者）にとって分かりやすいものにしようとする対処の方法となっている。その典型的な例として、起点テクストの言語（文化）に特有なものを、目標テクストの言語で詳細に厳密に記述することを敢えて避けるという方略である。これは、起点テクストの母語話者であれば喚起されるような具体的なイメージを細かく表現することよりも、全体的な物語の展開が滞りなく流れることの方を優先するための対処方法であることを指摘した。

最後に、3.3 において、目標テクストにおける情報の追加／削除の意図が不明な事例を見た。起点テクストの言語である日本語の母語話者として、原作から理解しうる（感じ取れる）事柄が、残念ながら、翻訳作品においては伝達し切れていないと思わざるを得ない事例もあることも論じた。

今後は、まず、本稿では取り扱わなかった、翻訳シフト（ズレ）における変更の事例 (2 c.) について、稿を改めて論じたいと考えている。この継続的な研究によって、さらに具体的に個々の事例に対して翻訳者がどのように対処（工夫あるいは苦心）しているかが考察できるものと思われる。

註および参考文献

[1] 貞光宮城. 「日英翻訳における受容化と異質化について(1)：吹き替え映画翻訳の認知言語学的事例研究」 『山口大学工学部研究報告』, 2020, 71 巻, 1 号, pp.1-6.

[2] 宮崎充保. 平成 26 年度観光政策 Informix「宮崎充保教授最終講義『コミュニケーションとしての翻訳』」講義配布資料, 2015 年 1 月 14 日, 於 山口大学経済学部.

[3] Venuti, Lawrence. *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, Routledge, 1995.

[4] 資料として使用した DVD には英語字幕が表示できるようになっているが、ここでは分析対象としない。この字幕は、当然のことながら、日本語音声に合わせて表示される。それに対し、ここで分析対象としている英語音声（目標テクスト）は、日本語音声（起点テクスト）と全く一致しているわけではなく、言語情報の提示の有無の点においてもシフト（ズレ）が存在している。

[5] 前拙稿同様、翻訳が全て文単位で行われるなどということを述べるものではない。言語的な情報量を概算するためだけのものである。当然のことながら、笑い声、鳴き声、感嘆詞（Wow!など）は算入していない。

[6] 翻訳テクストが長くなる傾向については、斎藤（2007）に以下のような指摘がある。

> ……、ここの語句の持つ意味がずれている以上、日本語を英語に訳す場合でも、英語を日本語に訳す場合でも、元々の文章に用いられている語句の意味を正確に写し取ろうとすると、どうしても余分な説明が必要となります。英語のある名詞のなかに〈A〉、〈B〉、〈C〉という意味素・ 意味成分が入っていたとして、さらにそこに〈X〉、〈Y〉、〈Z〉という意味素・意味成分を持った形容詞などがついていたとすると、最悪の場合、その全ての意味を日本語で表すためには六つの違った語句を用いなくてはならないことになります。元の文章よりも訳文のほうが往々にして長ったらしくなってしまうのはそのためです。（斎藤兆史.『翻訳の作法』, 東京大学出版会, 2007, p.30.）

[7] 例文の引用には目標テクスト DVD のインジケータを表示しておく。

[8] 久野暲. 『談話の文法』, 大修館, 1978 ; 西光義弘.「認知スタイルと言語類型」『言語学の視界』, 大学書林, 1978 ; 他。

[9] この例については、次稿で変更 (2c) を考察する際にも再度検討したいと考えている。

[10] Nisbett, Richard E. *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently, and Why*, Free Press, 2003. ; Nisbett, Richard E. and Takahiko Masuda. "Culture and Point of View," *Intellectica* 2-3, 2007, pp.153-172.

[11] 本稿では扱っていないが、受容化だけでなく、異質化においても、情報を明示化するという方略が用いられる。以下は、貞光（2020）で指摘した例であるが、ここでは時間的隔たり (1b) を明示化するために、映像で表示されている事物（radio）を言語化している。

運送屋： これ、どこへ運びます？
Moving Man: Mister, where do you want the radio?
（00.07.19）

[12] 以下の例では、映像と音声を時間的に合わせるだけでなく、映像で表示されている口の動きも可能な限り近い音声を選んで調整されていると考えられる。極めて高度な翻訳事例であるとみなすべきである。「行ってらっしゃーい」という口の動きに合わせて映像が表示されているところに、いくつもある英語のあいさつの中から敢えて "Have a nice day!" を選択しているものと想像できる。

サツキ： 行ってきまーす。
お父さん・メイ： 行ってらっしゃーい。
Satsuki: See you later!
Dad・Mei: Have a nice day!
（00.26.16）

[13] この点の検証には、今回とは逆の、英語から日本語への映像翻訳の状況を分析することで、検証できるかもしれない。本稿では取り扱うことができない。

[14] それほどの労力と紙幅（あるいは音声時間）を費やして目標テクストに移すよりも、それがなくても全体的な伝達内容に大きな影響を与えるものではないと、翻訳者が判断した結果であると言える。もしもここで、翻訳者が異質化する方を選択するならば、起点テクスト特有のその情報を進んで目標テクストに移すことによって、原文の雰囲気を読者に伝えようとする方略となるのである。いわば「費用対効果」の判断を翻訳者が行っていると言える。

[15] 資料として使用した DVD の英文字幕では dragon whiskers となっているが、著者が辞書を調べた限りではこの表現が「リュウノヒゲ」を指すことを示す記述は見つけられなかった。残念ながら、この表現で英語圏の視聴者に当該の植物がイメージできるとは思われない。

[16] 例えば「神池」を同じ音の「新池」と比較してみるとよい。日本語話者であれば、これらから受け取る情報は随分と異なるはずである。

[17] Lakoff, George. *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, 1987. ; Langacker, Ronald. W. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. 1, Stanford University Press, 1987. ; 西村義樹.「換喩と文法現象」, 西村義樹(編)『認知言語学 I：事象構造』, 東京大学出版会, 2002, pp.285-311. ; 籾山洋介.『認知意味論のしくみ』, 研究社, 2002.

[18] この例は、次稿で論じたいと考えている情報の「変更」の事例であるとも考えられる。ここでは、起点テクストで言語情報として提示されていたものが、目標テクストにおいて言語では表されなくなっているという意味で情報の「削除」の例として挙げておく。

[19] このとき、映像ではこの台詞の話し手の口は見えておらず、映像の時間に合わせて日本語と同じような長さにする必要はなかったと考えられる。

[20] 穿った見方をすると、発話者の口元が映像上で表示されていない音声が背景で流れているだけであるため、商業的理由から複数の異なった声優を起用することが避けられたのかもしれないとも考えられる。

（2022 年1月14日受理）